

特集 震災と女性の今～復興への活動とセンターの取組み～

クレオ大阪では、東日本大震災からの復興支援に様々な形で取組んでいます。それらの取組みについて福島県男女共生センターよりお手紙が届きました。

福島からの手紙

福島県男女共生センター館長 千葉悦子



かあちゃんの力・プロジェクトの販売風景

大地震、原発事故、全村避難へ

2011年3月11日東日本大震災により東日本の太平洋岸一帯は壊滅的打撃を被った。さらに、これに追いつきかけたのが東電福島第一原発事故である。内陸にある飯館村は地震による人的被害は僅かだったが、年間積算放射線量が20ミリシーベルトを超えることから、4月11日に計画的避難区域に設定され、全村避難を強いられることになった。二世代、三世代で同居していた家族は、「仕事」や「子どもの健康」、「教育」あるいは「狭い住居」のため、バラバラに引き裂かれた。数世代にわたって守り続けてきた農地や山が放射能で汚染され、「農」に生きてきた村の暮らしが根こそぎ奪われた。

一步を踏み出す村の女たち

国から全村避難の指示がされて1年、除染の有効性が不確かで、先の見えない不安にいらだつ者も少なくない。「もう戻れない」と諦めの声さえも聞こえてくる。しかし、その一方で、悔しさを噛みしめながら、一步を踏み出そうとする「おかあちゃん」たちがいることを知って欲しい。

クレオ大阪は昨年7月に、被災3県の物産を販売する「東北復興応援市場」を開催してくれた。その折りに現地の生の声を聞こうと、農家民宿を営んでいた飯館村の佐野ハツノさんの講演を企画してくれたが、その佐野さんが管理人を務める福島市内の仮設住宅では、呼びかけに応えて全国の方々が提供してくれた古着をリフォームして販売する女たちの「までい着」づくりが軌道に乗りつつある。飯館村、浪江町、葛尾村から避難してきた農業者女性たちの「かあちゃんの力プロジェクト」も本格化しつつある。地場産の農産物の加工販売を営んできた女性たちの知恵や技を活かす拠点を設け、ふるさとの復興につなげようという試みである。12月には、福島市郊外のあぶくま茶屋、三春町および二本松市内の仮設住宅内で、正月を迎えるための切り餅や漬け物を販売した。この間、現地研修や専門家を招いて研鑽を積み、今年5月には仮設住宅に住む避難者のための加工食品や弁当を販売する「かあちゃんの店」がいよいよオープンする。このプロジェクトの代表をつとめているのが村出身の渡辺とみ子さんである。村でどぶろくの製造・販売していた佐々木千栄子さんも福島市内でどぶろく造りを再開した。これらの取り組みに共通するのは、「これまで続けてきたことを諦めたくない」、「同じように避難している人たちを励ましたい」という強い思いであり、根底には「自分の足で立っていきたい」という自律意識がある。それを支える女性たちのネットワークや県内外の市民の存在も大きい。



ちば エツコ
千葉 悅子 さん

北海道大学院教育学研究科博士課程修了。福島大学行政社会学部講師、同教授を経て、現在は福島大学行政政策学類教授。専門分野はセンター学習論、地域づくり教育論、農民家族論。平成22年4月より福島県男女共生センター館長

センターが市民をつなぐ

クレオ大阪は、震災1ヶ月後にいち早くシンポジウム「現場で本当に必要な支援とは～大阪の私たちにできること～」を開催し、また先に述べた「東北復興応援市場」を実施し、被災地のために何かしたい市民一人一人の思いをくみ上げ、ネットワークを形成し、支援の気持ちを具体的な形にして私たちに届けてくれた。クレオ大阪が市民活動の拠点として機能していることを物語るものといえるだろう。クレオ大阪の取組みは、全国各地の男女共同参画センター同士が連携・協力できる力があることを示しただけでなく、東北と関西と距離は遠く離れていても市民同士がセンターを通じて「つながれる」ことを証明してくれたと思う。

今年2月には当館にてシンポジウム「2012.3.11に向けて～災害復興における男女共同参画センターの取組み～」を政令指定都市センターとの協働で開催したが、この企画実現のために力を尽くしてくれたのもクレオ大阪である。情報交流の貴重な機会というだけでなく、個々のセンターが被災支援のために重要な役割を担っていることが確認できたことは大きな成果だった。しかし、それにも増して勇気をもらったのは、「放射能」という見えない不安を抱える現地・福島に、全国から来ていただいたことである。クレオ大阪に心から感謝するとともに、大阪市民の男女共同参画の拠点センターとして、更なる発展・充実されることを期待したい。



シンポジウム「2012.3.11に向けて～災害復興における男女共同参画センターの取組み～」



東北復興応援市場の販売風景



『飯館村は負けない』
千葉悦子・松野光伸／著
岩波書店 平成24年3月発行

福島第一原発事故による放射能汚染で、思いもかけず全村避難を指示された村。丹精こめて村づくりに取組んできた人びとは、この困難にどう向き合っているのだろうか。諦めない人びとの長いたたかいに寄り添ってきた研究者が様々な村民の声を拾い、未来のために報告する。

